

Eureka X

六年制通信 No.32 令和5年1月20日(金)号

拡大解釈

大阪湾から淀川にクジラが迷い込んだとのニュースを耳にしたのは成人式の日でしたかね。私はこれを聞いた時、実に嫌な予感がしたのですが、案の定マスコミは「ヨドちゃん」とか名前をつけてはしゃいでいましたね。以前この通信に書いたように思いますが、今から約20年前には東京湾から多摩川に迷い込んだアザラシが「タマちゃん」と名づけられ、連日大変な報道ぶりでした。子どもっぽいですよ。ああいう報道の過熱ぶりは。それで、役所の人がそのタマちゃんを捕まえようとして失敗したのでした。詳しくは忘れましたが。うろ覚えで申し訳ないですが、確かしばらくタマちゃんが姿を現さなかったか何かで、どうも捕まえようとしたことでタマちゃんが怪我でもしたのではないかと、そんな話になったのです。そしたら「タマちゃんを見守る会」（こんな会がすぐ発足するんですね）の面々が役人に詰め寄っているではないですか、「タマちゃんに謝れ！」と叫んで。中に一人、今思えば今の私くらいのじいさんですね、あれは。えらい剣幕でね、目くじらを立てて（青筋も立てていたでしょうね、きっと）、逆上した感じで叫んでいました。あの、いきり立って叫んでいる老人を見て、いい大人が何を言っているのかと悲しくなったのを強く覚えています。何十年も生きてきた大人の一大事がアザラシのタマちゃんとは。幼稚園の年中さんくらいがタマちゃんがいなくなったと言って泣いているのならわかります。大人が幼児化しているのではないかと、当時から言われていましたが、まさにサンプルを見た気がして気持ち悪かったですね。どうして逆上しなければならないか、私には理解できません。

その幼児化はどんどん進んでいるようで、ネットの時代つまり匿名のはびこる時代がそれに拍車をかけているように思えます。アクションに対するリアクションが明らかにバランスを欠いている、そんなニュースが多いですね。1、2年前でしたか、中学生が同級生を刺殺する事件がありました。報道を信じれば、生徒会の応援演説を強制されたのが嫌だったとか。もちろん、殺意を持つに至るにはそれだけの理由ではないでしょうが、刺殺するだけの理由などあるはずがないと思います。ハムラビ法典の「目には目を、歯には歯を」は復讐を奨励しているかのような印象を受けますが、あれはそうではなく「相応の罰を与えることは許されるが、それ以上はいけない」という意味です。腕を傷つけられたら、その相手の腕を傷つけることは認めても、それ以上の仕返しをしてはならない、そういうことです。アクションとリアクションはバランスが取れていないといけないというわけですね。

タマちゃん騒動で、目くじらを立てていきり立っていた人々も、失礼ながら、精神の

バランスを著しく欠いているように見えました。昔読んだ本に、若者は時に「適度」ということがわからなくなる、何でも過度に反応してしまう、それが自分を苦しめるとも知らずに、ということが書いてありました。バカみたいな例ですが、ポテトチップスの封が開けられなかったら普通のハサミを使えばいいと思うのですが、庭木を切るような大きな剪定鋏を使って開けようとする、そんな滑稽な場面が若者にはあるというのですね。若いということは過剰ということでもあるので、時に「適度」を忘れるかもしれませんが、気をつけなければいけません。精神の安定が崩れると、拡大解釈が始まると言われています。ですから、それが精神が安定しているかどうかの目安と考えていいでしょう。自分で点検しましょう。拡大解釈とは、普段なら足を踏まれて「痛い」「あ、ごめん」「いや、大丈夫だよ」で済むようなことが、「あいつはそもそも前から気に入らなかつたんだ。俺を狙ってわざと踏んだに違いない」などと、実際の現象をそのまま解釈せず余分な意味を持たせて悪く考えていくことを言います。そうすると要注意ですね。過度に誰かを責めていないか、そこが内省ポイントです。

五木寛之でしたか、拡大解釈の笑い話を書いていました。うろ覚えですが、確か…。デートの約束をすると男が遅れてきた。「どうして10分も遅刻をするの？」(お前、前回1時間遅刻してきたよな)、これは何故遅刻をしたのか、その理由を尋ねているわけですね。だからこれはわかる。しかし「ごめん、仕事で遅れたんだ」と言えば「仕事と私とどっちが大切なの(そんなもん仕事に決まるとるやろ)、どうせあなたは私が死んでもお墓参りにも来てくれないのよ(遅刻と墓参りと何の関係があんねん)、こうなるとわけがわからない。しかも「墓参りくらいするよ」などと言おうものなら、「どうして私があなたより先に死ななきゃいけないのよ(なんでキレてんねん)と、泥沼にはまるわけですね。こわっ。

今週のおすすめ

・朝井リョウ 「エンドロールが始まる」(『少女は卒業しない』(集英社文庫)より)

中央公論社の螺旋プロジェクトの一冊『死にがい求めて生きているの』で初めて朝井さんの本を読みました。螺旋プロジェクトとは八人の作家が共通のテーマに沿って書くというもの。もちろん時代設定や小説のプロットは作家次第。私は薬丸岳さんが好きなので、彼もこのプロジェクトに入っていると知って読む気になったのです。薬丸さんの『蒼色の大地』は最後の方が少し急いだかなと思いましたが、朝井さんの本は最後まで破綻なく面白かったですよ。それ以来、たまに朝井さんの本を手に取ります。先日は『風と共にゆとりぬ』をグラグラ笑いながら読みました。今回紹介するのは短篇集の中的一篇。前に、小学生を描いたら重松清さんの右に出る者はいないでしょうと言いましたが、朝井さんは思春期の少女の心理を上手に描写しますね。「エンドロールが始まる」は高校を卒業する日、それまで図書室で交流のあった先生に自分の思いを伝えたい、そんな女子高生のお話。青春のほんのワンカット、1時間程度のことを丁寧に描いています。ほんとに、どこにでもある何でもないワンシーンなのですが、後味が非常にいいのは朝井さんの筆力ゆえですね。

BGMは Simon & Garfunkel の *Scarborough Fair* でした…。